

種之、一種蔓長丈餘、一種蔓短其葉俱本大末尖嫩時可茹其花有紅白二色、莢有白紅紫赤斑駁數色、長者至二尺嫩時充菜、老則收子、此豆可菜可果可穀備用最多、乃豆中之上品、而本草失收何哉、又曰、豇豆開花結莢、必兩兩並垂、豆子微曲、如人腎形、是可以充佐佐介、離離見西京賦、蜀都賦、及西征賦、

〔醫心方三十〕白角豆呂佐々々介和名志

〔類聚名義抄角三〕豆角サ、ケ 〔同豆五〕大角豆サ、ケ 白角豆同

〔大上臈御名之事〕女房ことば

一さ、げひよ。

〔日本釋名下穀〕豇豆 竹垣にたかくはひのぼりて、其實は物をさし上たるがごとく、たかくなる故にさ、げと名づく、

〔東雅十蔬三〕豆マメ略 倭名鈔に本草を引て、○中大角豆一名は白角豆サ、ケといふと註せし

は、サ、は細小也、ケといひ、キといふは轉語にして、並に角をいふ、角とは即莢をいふ也、日本紀には、豇角讀てササゲと云ひけり、今俗にはササギといふ

〔日本書紀十七〕元年三月癸酉、納八妃○中息長真手王女曰麻績娘子、生豇角皇女、豇角此三

〔物類稱呼三〕紅豆さ、げ 九州及上州信州總州にてふらうと云、關西にて十八さ、げと云を、關東にて十六さ、ぎといふ、案に關東にて大角豆の短く生るものをみづらと呼、西國にてはふたなりといふ、

〔倭訓菜中編九〕さ、げ 日本紀に角豇をよめり、倭名抄には大角豆とみゆ、九州及上州信州にふらうといふ、さしあげの義成べし、實のなるさま、竹垣などにさしあげたり、地さ、げあり、籬に及ばず、十八さ、げは、關東に十六さ、ぎといふ、十八豇繩さ、げは、裙帶豆也といへり、信濃さ、げ